

<活動の概要>

2016 年度の主な活動の中で、最も注力したのは IAMAS 開学 20 周年記念事業として二つの展示イベントを産業文化研究センター (RCIC) として企画運営したことであろう。20 周年記念事業以外にも、OGAKI Maker Faire や卒展など大きなイベントが重なり、RCIC としては極めて多忙な 1 年となり、スタッフ管理も難しかったが、大きな山に挑戦することで、センターとしても力をつけることができた。

個人の研究に関しては、個人での研究成果を国際メディアコミュニケーション学会で発表し、本として出版されることになった (2017 年 5 月刊行予定)。学内プロジェクト研究も、地域活性学会やエンターテイメント・コンピューティングコンファレンス 2016 で報告を行うなど、地道に成果をあげることができた。

<学内での活動>

1 産業文化研究センター (RCIC)

2016 年度の業務の中で、最も大きかったのは二つの開学 20 周年イベントを企画し、実施したことである。一つは、IAMAS2017 での「振り返る IAMAS の 20 年」と題した展示である。これは開学から 20 年の沿革やプロジェクトの変遷、全展覧会ポスターなどのデータをビジュアライズし、またこれまでの印刷物や映像などの広報物をまとめて展示したものである。データ収集から分類、展示制作と地道で骨の折れる作業であったが、IAMAS2017 では、岐阜県知事による 20 周年祝式典が開催され、多くの県関係者へ IAMAS の 20 年をアピールする機会となった。在校生や卒業生、あるいはイアマスを知らない人たちにとっても、イアマスの歴史を知る機会となり好評であった。

もう一つは、2016 年 3 月 10~16 日にラフォーレミュージアム原宿にて開催した「Calculated Imagination IAMAS が発信するメディアアート」展である。これは、ラフォーレミュージアムと共催することで、低予算での開催を可能にし、かつ、全てのプロセスに卒業生の全面的な協力があって実現できた事業であった。ディレクターに RCIC の高尾俊介研究員を抜擢し、本学の伊村靖子講師をキュレーターに迎え、6 つの卒業生の作品を展示した。また、会場では「振り返る IAMAS の 20 年」も再度展示した。開催直前には ICC とコラボしながら DOMMUNE でのトークイベントを実施し、会期中には、NxPC によるサーカス TOKYO でのクラブイベントとの連携など、充実したイベントを企画運営することができた。ミュージアム来場者は 2800 名を記録、原宿というロケーションにより、これまでアプローチの弱かった若者層

にアピールできる機会となった。時間と予算が非常に限られている中での不慣れな事業実施でスタッフにとっても大変であったが、多くのイアマス関係者の協力を得て無事終了できたことは、RCICにとって大きな成果となったと言えるであろう。

産学官連携については、2016年度も様々な相談や事業があった。RCICが直にディレクションしたのものとしては、揖斐川ワンダーピクニック（揖斐川町）での「地獄絵スタンプラリー」、岐阜県美術館の特別企画展「アートまるケット」でのワークショップや展示、「赤でんランド」（御嵩町）での技術支援などがあげられる。イアマスの連携事例に関しては、2016連携報告書として発行した。

また、2016年12月にRCICの新しいウェブサイトを開示した。これまであまり発信してこなかった活動やプロジェクトなどをこのサイトを通して、今後積極的に公開していく予定である。

2 研究プロジェクト

今年度は代表として2つのプロジェクト（地域・メディア・鉄道プロジェクトと根尾コ・クリエイション）を継続的に実施した。特に根尾コ・クリエイションは現地での作業が中心となり、かなりの時間をかけたが、その分多岐に渡る活動を展開することができた。鉄道プロジェクトも3年目となり、成果をあげることができた。（これらの詳細は各プロジェクト報告を参照のこと）また、2016年は新たに始まったTOYプロジェクト（クワクボリョウタ准教授代表）に分担者として参加し、創造することを新しい視点でアプローチすることに考える契機となった。

2016年8月には、国際交流基金アジアセンターと共催で「Summer Camp: Hack the world 2016」を開催し、根尾プロジェクトとして参加した。特に、樽見鉄道の車両を教室としてレクチャーを行ったり、根尾をフィールドワークの場にしたりと、日本の地方をユニークな形で取り入れた内容に対してASEAN諸国から参加したクリエイターたちからは高い評価を得ることができた。また、これまで研究プロジェクトを通して関係を築いてきた根尾の人たちや樽見鉄道とのこういったコラボレーションは、双方にとってメリットがあり、今後も積極的に実施したいと考える。

<個人研究や学外での活動>

1 コミュニティラジオの調査と成果の公開

「日本型コミュニティ放送の成立条件と持続可能な運営の規定要因」（科研基盤B）での調査をもとに、成果の一部を国際メディアコミュニケーション

ン学会（査読付き）で発表した。また、成果は『日本のコミュニティ放送 基幹放送の理想と現実の間（はざま）で』（晃洋書房）として、2017年5月に刊行を予定している。

2 その他、コミュニティに関する調査や活動

コミュニティの消えていく風景や記憶に関する調査を開始した。その一つとして、インドネシアのメラピ山周辺のコミュニティラジオ局や災害アーカイブミュージアムの視察を行った。また現地でのワークショップに参加した。インドネシア視察の一部は紀要にて報告した。国内でも、311に関する展示やパネル（仙台メディアテークや東京路地人、千代田3331や福島など）に参加した。これらの調査や活動は、来年度以降、本格的に開始するコミュニティの記憶と記録に関する研究の基礎的な資料の一部となる。

その他にコミュニティ活動として、これまで美濃の家プロジェクトで拠点としていた美濃の家を2016年4月より地域コミュニティへ移行し、その運営メンバーとして活動している。徐々に、美濃の家が地域コミュニティにより開かれた場所となっていくつつある。

また、東日本大震災でのコミュニティラジオ関係者たちの活動「陸前高田昔語りの会」が収録している地域の高齢者の語りを、本学生の開発した「つみき語り」を使い保存・活用していく活動も行った。この取組みについては、昔語りの会の人たち、語った高齢者のみなさん、地域の人たちなどから高く評価され、東海新報（大船渡市）でも取り上げられた。今後、継続可能な仕組みについて検討していく。

その他、岐阜県の移住促進事業（モデレーター）や仙台市の地域プロジェクト関係のシンポジウム（パネリスト）など、これまでの研究や活動を他の地域で活かす機会にも恵まれた。

個人的には、保護猫活動や殺処分ゼロの推進、犬猫里親探しのネットワークの活動を行なっている。

3 学会発表や著書

Tomoko Kanayama“Community Radio and Cultural Identity: Case Study of the Amami Islands of Japan,” (Peer-reviewed) IAMCR Conference 2016, 2016 July (Leicester, UK)

金山智子他「根尾コ・クリエイションプロジェクト：限界集落における新しい価値創出の試み」地域活性学会第8回研究大会(長野県小布施町) 2016年9月

平林 真実, 金山 智子, 市野昌宏, 中原淳「メリーからくりスマス：乗車体験を拡張する位置運動型車内デコレーション」エンタテインメントコンピューティングシンポジウム2016 論文集, 2016, pp248 - 251,

2016-11-05

金山智子「地域メディアと災害の記憶～ムラピ山の災害ミュージアム試作
報告」情報科学芸術大学院大学紀要第8巻,pp.66-70.

4 研究助成

公益財団法人小川科学技術財団 (共同研究)

5 その他 社会活動など

一社) 社会情報学会 評議員

公益財団法人プランジヤパン 理事

特定非営利活動法人地域魅力 監事

愛知県立芸術大学 非常勤講師 (博士生外部指導教員)

ZIP-FM 番組審議委員会委員 (委員長代理)

さかの映像祭実行委員会委員 (聾啞者の映画) および映画祭審査委員